

## 畜産試験場 養鶏研究所 概要

### 1 建物・施設・ほ場等

総面積	9,209.00 m <sup>2</sup>
建物敷地面積	2,202.48 m <sup>2</sup>
建物延面積	2,225.01 m <sup>2</sup>
本館延面積	399.12 m <sup>2</sup>
付属施設延面積 (27棟)	1,825.89 m <sup>2</sup>
その他	5,100.00 m <sup>2</sup>

### 2 平成22年度予算

総予算額	21,104 千円
内訳	
総務管理費	6,109 千円
試験研究費	14,955 千円
(うち備品購入費)	1,700 千円)

### 3 平成22年度参観者数

1,102 名

### 4 平成22年度試験研究 (調査) 結果の概要

#### 1) エコフィードを利用した低コスト飼養技術の開発

養鶏用エコフィードの開発

(7,884千円 県単 H21~23年)

[内容]

飼料価格の高騰に対応するため、食品残渣及び県内未利用資源を活用した和歌山版エコフィードを開発し、採卵鶏およびブロイラーへのエコフィード給与試験を実施する。

[結果の概要]

昨年開発した未利用のごはん及び麺で製造されたエコフィードに乾燥したおから、卵黄色を整える色素剤を配合した新たなエコフィードを開発し、配合飼料の10%まで利用できることを確認した。

#### 2) 有機性資源リサイクル技術開発事業

##### (1) 梅酢の養鶏用飼料化技術の開発

(3,763千円 民間受託 県単 H19~24年)

[内容]

梅酢を養鶏用飼料素材として活用するため、梅酢を低コストで養鶏用飼料に調整する技術の開発、鶏生体・生産物に与える影響を調査する。

[結果の概要]

採卵鶏、ブロイラーともに新梅酢による生産性、生産物への悪影響は特に認められなかった。利益試算等により新梅酢の最適添加濃度がわかった。

##### (2) じゃばらを活用した飼養技術の開発

(1,047千円 県単 H22~23年)

[内容]

じゃばら搾り粕を養鶏用飼料素材として活用するため、じゃばら絞り粕を養鶏用飼料に調整する技術の開発及び鶏生体・生産物に与える影響を調査する。

[結果]

じゃばら搾り粕を3%添加することで、むね肉中のビタミンE含量が増加することから差別化した商品販売が可能と考えられる。

### 5 一般業務概要

#### 1) 平成22年度主要行事及び特記事項

- (1) 平成23年1月18、20日、高病原性鳥インフルエンザの防疫演習及び橋本市での焼却演習が行われた。
- (2) 平成23年2月15日、高病原性鳥インフルエンザ対策により消石灰を散布した。

#### 2) 平成22年度刊行物一覧

・「紅冠だより」

3) 平成22年度主要な技術研修及び講演等実績

月	内 容	場 所	対 象
4	・和歌山版エコフィード開発に係る説明会 ・体においしい卵・とり肉生産技術開発に係る成果発表報告会	湯浅町 和歌山市	有田養鶏農協組合員 共同研究者及び関係者
6	・(社)畜産協会わかやま通常総会 ・有機資源リサイクル技術開発実用化について	和歌山市 白浜町、和歌山市	会員、県関係者 養鶏農家
7	・和歌山版エコフィード開発実用化について ・和歌山県養鶏協会通常総会	御坊市 和歌山市	養鶏農家 会員、県関係者
8	・和歌山版エコフィード開発実用化について	橋本市	橋本市養鶏農協組合員
11	・じゃばら粕を利用した地鶏生産技術開発	北山村	北山村、地元関係者
12	・県家畜保健衛生畜産技術検討会研究発表	和歌山市	家畜保健所、畜産課、畜産協会等

4) 平成22年度研究成果の発表・公表

(1) 一般雑誌

なし

(2) 著書

なし

(3) 学会発表・学会誌等への投稿

題 名	発 表 者	発 表 誌
・和歌山版エコフィードの早期実用化に向けた戦略	福島 学	和歌山県家畜保健衛生・畜産技術検討会（口頭発表）
・ライストリエノール×農林水産戦略プロジェクト	橋本典和	和歌山県家畜保健衛生・畜産技術検討会（口頭発表）

(4) 農林水産省研究会等資料

題名	発表者	発表誌
・和歌山版エコフィードの早期実用化に向けた戦略	福島 学	和歌山県家畜保健衛生・畜産技術検討会（口頭発表）
・ライストリエノール×農林水産戦略プロジェクト	橋本典和	和歌山県家畜保健衛生・畜産技術検討会（口頭発表）

(5) 新聞・雑誌掲載

記事見出し（内容）	掲載年月日	掲載紙名
・じゃばら地鶏特産品に	H22.11.18	読売新聞
・じゃばら地鶏いかが	H22.11.18	産経新聞
・じゃばら地鶏開発・ブランド化へ	H22.11.19	紀南新聞
・じゃばら地鶏を開発	H22.11.19	熊野新聞

## 林業試験場 概要

### 1 建物・施設・ほ場等

総面積	149.74 ha
建物敷地面積	33,495 m <sup>2</sup>
建物延面積	3,908 m <sup>2</sup>
本館延面積	1,862 m <sup>2</sup>
付属施設延面積(29棟)	2,046 m <sup>2</sup>
ほ場面積	27.79 ha
試験林面積	118.60 ha

### 2 平成22年度予算

総予算額	26,251 千円
内訳	
総務管理費	8,827 千円
試験研究費	7,649 千円
その他	9,775 千円

### 3 平成22年度参観者数

1,200 名

### 4 平成22年度試験研究結果概要

#### 1) 森林の循環利用に向けた管理技術の開発

(経営環境部 1,656千円 県単 H22～26年)

[内容]

- ①長伐期施業に対応した森林管理技術の開発
- ②人工林伐採跡地における森林再生状況調査
- ③ヒノキ花粉症対策品種の創出
- ④高抵抗性マツの開発

[結果の概要]

- ①有田・西牟婁管内の75～105年生の高齢人工林において毎木調査を行った。また一部の林分において樹幹解析用の円板採取を行った。
- ②人工林伐採跡地の植生実態を明らかにするために、東牟婁地域において5林分を抽出し毎木調査を行った。
- ③他府県産の花粉の少ないヒノキ品種と本県精英樹の人工交配試験に向け、ジベレリン処理により雄花、雌花の着花促進を行った。
- ④抵抗性マツ同士の人工交配試験に向け、雄花、雌花の着花状況調査を行った。また、既存の抵抗性マツのクローン毎にマツノザイセンチュウ接種検定を実施し、生存率を調査した。

#### 2) 健全な森林づくりに関する研究

(経営環境部 1,826千円 県単・一部委託 H21～25年)

[内容]

- ①特用樹種の病害虫防除手法の確立
- ②カシノナガキクイムシ防除手法開発

#### ③森林立地環境の違いによる蓄積炭素量調査

[結果の概要]

- ①コウヤマキの集団枯損原因を解明するため、田辺市中辺路町と龍神村護摩壇山に試験地を設定し、分離培養したチャアナタケモドキ菌の人工接種を行い、感染状況を調査中である。
- ②カシノナガキクイムシによる被害拡大状況を把握するため、被害未確認区域を中心に目視調査を実施したところ、被害区域はすさみ町全域へと拡大していた。また、備長炭原木であるウバメガシ林において、被害変移の調査及びおとり木による防除試験を行った。
- ③枯死木、堆積有機物、土壌中に含まれる炭素量の推定精度を高めるため、県内7箇所において調査を実施した。試料は、容積重測定の後、森林総合研究所(炭素・窒素分析実施)に送付した。

#### 3) 自然エネルギーを生かした木材乾燥技術の開発

(木材利用部 531千円 県単 H20～24年)

[内容]

- ①熱利用環境・吸排気環境の改良
- ②乾燥スケジュールに関する調査
- ③仕上がり品質に関する調査

[結果の概要]

- ①ビニールハウス内のアルミシート被覆試験室における温湿度環境変化について調査し、断熱性能を向上させることによって夜間の室温低下を抑制